
月読の塔の姫君

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の塔の姫君

【Nコード】

N0632BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

『イルーシャはわたし、わたしはイルーシャ』
今まで情性で生きてきた少女、由希。ある日目覚めたらなぜか絶世の美女になっていた彼女は、古の王妃として第二の人生を歩むこととなって。

伝説の姫君と呼ばれた少女とその周囲の人々と国の変化の物語。

00 伝承

緑と魔法の国、ガルディア。

かの大国には伝説となつてゐる美しい眠り姫がいる。

それはむかしむかしのおとぎ話。

アークリッド王の妃、イルーシャ姫は月光のような淡い金の髪と、青い月のような瞳をしたそれは美しい姫君だった。

王とイルーシャ姫はそれは仲睦まじく、お互いを思い合つて穏やかな時を過ごしていた。

しかしある時、姫君は横恋慕した悪しき魔法使いに呪いをかけられ、長き眠りについてしまふ。

どうにかして姫の呪いを解こうとした王だが、その方法を知つてゐるのは呪いをかけた魔法使いだけ。しかし、呪いが成就した魔法使いはそれに満足したのか、それ以来姿をくramましたまま行方が知れない。

王は昏々と眠るイルーシャ姫をかき抱き、絶望に嘆き哀しんだ。

その後、優れた魔法使いでもあつたアークリッド王は月読の塔に姫の身を移し、かの王以外誰も近寄ることが出来ないように魔法をかけた。

王は姫が眠りについてからも以前と変わらず足繁く彼女の元へと通い、それは王が退位して死につくまで続いたという。

ガルディア王国の月読の塔に今も姫は眠る。

吟遊詩人たちは詠う。

姫君は長い年月をかけて再び半身たる王と出会うことを夢見てゐるのだと。

01 目覚め

……んゝ……朝？

瞼越しに光を感じて、わたしは寝返りを打った。

柔らかく体を支える布団の感触に違和感をふと覚える。

うちのベッドのマットレスはこんなに柔らかくない。堅くて、長時間寝るともれなく腰が痛くなるというありがたくないオプション付きだ。

それがなに、このふつかふか。

「……え？」

そこでやっと家のベッドでないことに気づいて、わたしは飛び起きた。

……えーと、ここどこよ？

ベッドの天井から透けるような薄い布が幾重にも垂れ下がっている。いわゆる天蓋というやつだろうか。

天蓋付きのベッドなんて初めて見たよ、それだけじゃなくて寝ちゃったよ、うわあ。それも半端じゃない広さだし。

知らないうちに気を失ってどこぞの金持ちが家のベッドに寝かせてくれたとか？ ……いやいや、そういう場合、普通救急車呼ぶよね、などと、我ながら寝ぼけたことを考えながらベッドの端まで移動しようとした時。

「……なにこの格好……」

自分が中世ヨーロッパに出てくる人物のようなドレスを着ていることに今更ながらに気が付いた。

……なんだ、これは。なにかのコスプレかなにか？

ひらひらでふりふりでふわふわの衣装に、なんだか目眩がしてき

た。

普段ジーンズが多いわたしにはある意味拷問だ。

それに、なんかさつきから視界に金色の髪がちらちらしてるんだけど、これってウィッグだよ。それも半端なく長い。間違いなく膝裏まであるだろう。なんでわたしはこんなもん被ってるんだ。

鬱陶しくてしょうがないので、思い切ってそのヅラを引っ張ってみた。

「うあ」

痛い。

ちよつと涙目になりながら、わたしは地肌から抜けた数本の髪を見つめた。

ひよつとしてこの髪は本物なのでは？ という考えがよぎったが、わたしは頭を振ってそれを否定する。

いやいや、間違いなくわたしは平均的な日本人。わたしの地毛は、染めてない黒髪のはずだ。

なんだか妙なことに巻き込まれているような気がした。

とにかく誰かに会ってこの状況を把握しないと。

そう決心してベッドから降りる。

部屋の中はベッドと同じくアンティークな家具が備えつけられていた。

売ったらいつたいいくらになるんだろう、と夢のないことを考える。

いや、そんなことを考えてる場合じゃなかった。まず、この状況を分かる人を捜さなければ。

「あのー、誰かいませんかー？」

ドアから顔を出して大声で叫んでみる。

……けれど、期待した返事はない。

「……仕方ない、探しにいくかなあ」
ドレスの裾を踏まないように注意しながら螺旋状の階段を降りていく。

こんな所で下手に転んだら、絶対大怪我じゃすまない気がする。
なんだろうこの建物、ひよっとして塔、なのかな……？ 変に縦に長い気がする。

それに窓がないのに妙に明るい。……なのに照明らしきものが見当たらないとはどういうことだ。

不思議に思いながらも、わたしはどこまで続くか分からない階段を降り続けた。

「っ、疲れた……」

いったいどのくらい時間がたっただろう。

なんか変なコスプレしてるのもあって、神経使っついでに疲れた気がする。

塔の出口らしいドアを開けると、幸運なことに庭師らしいおじさん（多分）の後ろ姿が見えた。

自分が妙なコスプレをしているのは気になっていたけど、わたしは思い切っつてそのおじさんに声をかけてみることにした。

「……あの、すみません」

「ここはどこでしょうと聞こうとした時に、おじさんが振り向いた。

「……ひいっ！」

「うわああっ！」

まるで幽霊を見たかのような反応をされて、ついっつられて叫んでしまった。

その反応はちょっと失礼じゃない？ と思っつておじさんを見る。

あ、このおじさん、後ろから見たときは気が付かなかつたけど、外人さんだ。

日本語が通じるかは分からないけど、やっと会えた人だ、とりあえず話しかけてみよう。

「ちょっと聞きたいことがあるんですけど、あの、他に誰かいませんか？」

この言いぐさは自分でもどうかと思ったけど、人の顔を見て腰を抜かしたおじさんではどう考えても話にならないだろう。

おじさんは、ああ、とか、うう、とか意味不明な呻き声をあげながら震える手である方向を指差した。

あ、日本語が通じる人みたい。良かった。

内心ホツとしながら、おじさんが示した方向を見ると、一応舗装されてる小道がある。建物らしきものは見えないけど、多分その方向に人がいることは確かなんだろう。

「ありがとうございます。助かりました」

軽く頭を下げて、その場を後にする。

後ろからおじさんが神よ、とかなんとか呟くのが聞こえてきたけど、気のせいだと思いたい。

まさかホラーなメイクでもされてるんじゃないだろうなと思って顔に触ってみる。

……すべすべだ。

化粧してる感じはしないし、すっぴんとしか思えないんだけど、おじさんのあの怯えようはちょっと気になる。

そんなことを考えながら、小道を歩いていたら。

「塔の結界が消えたと思ったら、まさかこんなことが起こるとはね」
流暢な日本語でそう言ったのは、超が上に付くような美形のお兄さん。なぜかこの人もわたしと同じファンタジー映画に出てくるような格好をしている。

長い金髪に緑の瞳。この人も外人さんだ。

なんか外人率高いな！ と言っても出会ったのはお兄さんを入れて二人だけ。

あのー、もしもし？ 今あなた、どこから出てきましたか？
なんだか突然現れたような気がするんですが。
思わずぼかんとしていると、目の前のお兄さんはちょっと目を見
開いてから、わたしをまじまじと見つめた。

「伝承通りだ、月光のような髪と青い瞳」
はい？ この人、今青い瞳って言わなかった？
この鬱陶しいくらい長い髪がウィッグなのは分かるけど、わたし
はカラコンまで入れてるのか？ コスプレにしても、なにその徹底
ぶり。

わたしにこの格好をさせた人物の執念にちょっと青ざめていると、
美形のお兄さんは私の前で片膝をついた。
え、と思っただけで見ていると、お兄さんはおもむろにわたしの手を取
る。

え？ え？ ちょっと、なにする気？
これは、ひよっとして、ひよっとすると。

「まさかあなた様に出会える日が来るとは思いもしませんでした。
わたしにとって、これ以上の幸福はございません」
美形のお兄さんはそう言うてにっこりと微笑むと、うやうやしく
わたしの手にキスをした！

うわああああっ、まさかと思ったけど、この人本当にやってくれ
たよ！

「な」
思わず固まるわたし。

生粋の日本人であるわたしにこれは無理。
恥ずかしい。恥ずかすぎる。

「ああああの、あの……っ」
もの凄くどもってしまったが、この場合これくらい動揺しても仕
方ないと思う。

頬が熱い。きつと今わたしは真っ赤になってるだろう。

わたしの手を離して立ち上がったお兄さんは不思議そうに首を傾げた。

「なにか変だな。君はイルーシャ姫だよな？」

イルーシャ姫？ 誰だ、それは。

「人違いですっ」

ぶんぶんと首を横に振って否定したわたしに、お兄さんの質問が続く。

「でも、君、塔から出てきたよね。だとしたら、姫としか考えられないんだけど」

「確かに塔から出てきましたけど、わたしは姫とかじゃないですっ。わたしの名前は原田由希。日本人でただの一般庶民です！」

「ハラード・ユーキ？ ニッポン？」

ちよつと、なんでいきなりカタコトになるんですか、お兄さん。

それにハラード・ユーキって呼び方、なんか間抜けでやだ。

「いえ、ユーキじゃなくて、ユキ、由希です！」

「ユーキ」

それからお兄さんとの攻防は少しばかり続いたけれど、結局わたしが折れる形で収束した。

「……もう、ユーキでいいです……」

肩を落とすわたしに、お兄さんは苦笑してごめんね、と謝った。

どうやらわたしの名前の発音は外人さんには難しいらしい。

「話を戻すけど、君は姿はイルーシャ姫だけど、中身はユーキって
いう女の子なのか」

「さつきからイルーシャ、イルーシャって、誰ですか、それ」

「伝説の姫君。月読つきよみの塔の眠り姫だよ」

「はあ、でんせつのひめぎみ、ですか」

「なんでそこで棒読みになるのかな？ 信じてないみたいだけど、僕は嘘はついてないからね」

お兄さんは苦笑するけど、こんな荒唐無稽な話、信じるという方

が無茶だ。

「……ああ、そうか。君はまだその姿を見ていないんだね？　なら、信じられないのも無理ないか」

お兄さんは頷きながらなにかを呟いた。

そこ、一人で納得しないでください。そう言おうとした途端、周囲の風景が一変した。

「え……ええええっ!？」

さっきまで外にいたはず。なのに今いるのは豪華な内装の室内。

「なんだか随分驚いてるようだけど、ひょっとして移動魔法を知らなかったりする?」

……移動は分かるけど、魔法ってなに。それって、ファンタジー小説とかでよく出てくるあの魔法?

なんかいろいろと妙な展開ばかりで頭が痛くなってきた。

「魔法という言葉は聞いたことはありますけど、実際に見たのは初めてです」

こみかみを押さえながら言うと、瞠目したお兄さんに初めて?と聞き返された。

なに、それ驚くようなこと?

とりあえず頷き返すと、お兄さんはふうんと呟いてなにかを考えている素振りをした。

「君がいたニッポンって国には、魔法の概念はあるのに実行はされてなかったのか。実に興味深いけど、今はそれを聞いている場合じゃなかったね。……君も訳の分からない状況で大変だろうけど、まだしなければならぬことが残ってるよ」

そうだった、このコスプレがどうなっているのか確認しなきゃいけないんだった。

お兄さんに促されて、華奢なデザインのいかにも高価そうな鏡の前立つ。

目に入ってきたのは、儂げなお姫様。

緩やかに波打つ淡い金の髪と、淡い青の瞳。年齢的には少女と女性の間といったところじゃないだろうか。

小さな顔に、それぞれのパーツが絶妙に配置されている、絶世の美貌。

傾国の美姫っていうのはこういう人のことを言うのね。……って、見とれている場合じゃなかった。

これ、もしかしてわたし？ いやいや、まさか、わたしがこんな美女のわけないじゃない。顔の作りからして全然違うし。

無理矢理笑ってみる。お姫様がどこかぎこちない笑みを見せる。思い切り顔をしかめてみる。お姫様が難しい顔になる。

右手を挙げてみる。お姫様もそれに合わせて手を挙げる。

鏡の前でターンしてみる。お姫様もターンする。

なんだこれは。なんだこれは。なんだこれは。

これはもしかして、……わたし？

「なにこれえええーっ!!」

自分に起こった事態を理解した瞬間、わたしは喉も裂けんばかりに絶叫した。

02 王との対面

「ちょっと、笑いすぎ。失礼です！」

腹を抱えて爆笑するお兄さんに、わたしは涙目になって抗議する。確かにさっきのわたしは端から見たら変な人だったかもしれないけれど。

「ごめん、ごめん。まさか叫び出すとは思わなくて。でも、これでは状況は理解できたみたいだね」

無然としているわたしに、笑いをこらえているお兄さん。頼みますから、わたしのさっきの奇行は忘れてください。

「姫が目覚めたとなったら、王に知らせないとならないんだけど。」

僕は目通りの許可を貰ってくるから、君のことは侍女達に任せるけど、いいかな？」

「ちょっと待って、『おう』って、王様!？」

「わたし、王様に会わないといけないんですか？ それにここはどこなんですか？ わたし、これからいったいどうなるんですか!？」

わたしは浮かんでくる疑問を矢継ぎ早に出した。

「だって、いきなりこんな美女になって、王に会わせるだなんて言われたら訳分らないよ！」

「ここはガルディア王国。君から見ればたぶん異世界だよ。ここにはニッポンなんて国は存在しないしね」

「異世界……?」

あまりのことに呆然とお兄さんを見る。その顔は真面目そのものだ。

確かに魔法なんてものがあるし、日常では考えられないことだけだ。

「信じられないかもしれないけど、夢でもなんでもなくて、これは現実だよ。……君には気の毒だと思っけど」

「嘘……」

嘘だよ、日本が存在しないなんて。じゃあ、わたしはどこに帰ればいいの？

混乱のあまり涙が浮かんでくる。

「……ああ、泣かないで。酷かもしれないけれど、絶対に悪いようにはしないから」

お兄さんが指を延ばしてわたしの涙を拭いてくれる。

「そのためにも王に会うことは重要なんだ。……君がその姿でいることも関係あるしね。いきなり王と対面なんて不安かもしれないけれど、僕も同席するから我慢してね。それから王の名はカデイスっていうんだけど、彼は僕と歳も近いし、そんなに緊張する人物でもないから大丈夫だよ」

安心させるようにそつと頭を撫でてくれるお兄さんに頷くと、ほつとしたように彼は微笑んだ。

わたしから離れて、じゃあまたね、と言ってその場を去ろうとしたお兄さんにわたしは慌てた。

わたし、お兄さんの名前聞いてない！

「あいつ、お名前伺ってもいいですか？」

今気づいたとばかりに、ああ、とお兄さんは立ち止まる。

「これは失礼しました。わたしはキース・ルグラン・レグ・アレギリア。ガルディア王国の魔術師師団長を務めています。以後よろしく願いいたします」

胸の前で右腕を掲げ、丁重にお兄さん、じゃなくてキースさんは言った。

美形はなにをやってもし絵になるなあなんて頭の隅で考えながら、わたしも慌てて言う。

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

キースさんはその言葉に微笑んで頷くと、それじゃあね、と部屋を出ていった。

それから程なくしてドアを叩く音がしたので、はいと返事したら、キースさんが言った侍女と思わしき人が入室してきた。

だいたい四十歳くらいだろうか。栗色の髪をひつつめた青い瞳のその人は、とても品の良い感じがした。

「失礼いたします。わたくしは侍女長を務めております、リイナと申します。僭越ながらわたくしがイルーシャ様のお世話をさせていただきます。伝説の姫君にお仕えできるなんて、わたくしは果報者ですわ」

……侍女長といったら結構偉い人なんじゃないだろうか。そんな人に頭を下げられて、ここまでへりくだられると、逆にこっちが恐縮してしまう。

「こちらこそよろしくお願いします。目覚めたばかりで、事情がよく分からないのですが、よろしくご指導をお願いします」

「まあっ、わたくしのような者にそんなお言葉をかけて頂けるなんて。イルーシャ様はなんて素晴らしい方なのでしょう。わたくし、誠心誠意あなた様にお仕えさせて頂きますわ」

ぺこりと頭を下げたわたしに、心底感激したようにリイナさんは言った。

いや、中身は一般庶民なので、リイナさんの方が偉いんですとは、この場合、言わない方がいいんじゃないだろうか。

「それでは支度の準備をさせて頂きますね」

リイナさんが手を叩くと、さらに二人の侍女が現れた。

だいたいわたしと同じくらいの歳だろうか。二人はそれぞれシェリーとユーニスと名乗った。

「まずは、ご入浴して頂くこととなります」

ご入浴……お風呂!?

リイナさんに手を取られてだだっ広いお風呂場に連れて行かれたいや、お風呂場というより、立派な浴場と言った方が正しいかも知れない。

その豪華さに見とれてみると、ユーニスさんとシェリーさんがわたしの着ていたドレスを脱がしにかかった。

ひいい、なにするの!?

思わず二人の手を払いのけようとして、わたしははた、と我に返った。

リイナさん達にとっては、あくまでもわたしはイルーシャ姫なんだ。姫はこんなところで暴れたりしないよね。

耐える、わたし。温泉施設だと思えば恥ずかしくない……かもしれない。ただし、わたし以外の侍女さん達は服着てるけど。

同性とはいえ、他人に衣装を剥かれる羞恥と戦っていると、リイナさん達に感嘆したような溜息をつかれた。

「まあっ、なんて魅力的なお体なんでしょう。輝くような白いお肌といい、どんな殿方もイルーシャ様の前ではいちころですわ」

うつとりとそう言ったのは赤みがかった金髪に榛色の瞳のユーニスさん。リイナさんとシェリーさんも同意するように頷いている。

「そ、そう……」

見下ろしてみると、確かに出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいる体つきをしている。

こんなところまで完璧なのか。イルーシャ姫、恐るべし。

その後のことはあまり思い出したくない。

とりあえず、リイナさん達に体の隅々まで洗われてしまったことだけは言っておく。

でもまあ、侍女さん達に洗ってもらって正解だったと思ったのは、髪。

あまりにも長すぎるので、一人じゃ洗うのはきつと大変だったろう。

いっそ切った方がと提案したら、侍女さん達に揃って「こんな見事な御髪をとんでもない！」と反対された。

いやー、でも毎回侍女さん達に洗って貰うのもなあ。それにやっぱりお風呂は一人でゆっくり入りたいのよ。

でも無理なんだから、と今日一日でいろいろと諦めながら、お風呂からあがったわたしは、リイナさん達に手際よく着付けをされた。

「まあ、瞳と同じ色のドレスがよくお似合いですわ」
淡い青色のドレスを身につけ、小さな白い花を髪に編み込んだ姿は、清楚で可憐と言うのにふさわしく、確かに似合ってる。
それからリイナさんが、支度ができたことをキースさんに連絡しに行つて、ようやく王様とご対面、という段になった。

わたしを見たキースさんは瞳を見開いてから、少し眩しそうに目を細めた。

「とても綺麗だ」

「ありがとうございます」

うん、イルーシャ姫がね。

わたしは人に褒められるのがとても苦手なんだけど、本来と外見が違いすぎるせいとか、どうも他人事のようにしか感じられないんだよね。だから、こんなふうにならうと流せてしまふ。

「本来なら謁見の間で行うのが正式なんだけど、執務室になつてしまつてごめんね？」

「いえ、その方がこっちも助かりますから」

キースさんはいかにもすまなそうに言うけど、そんなに仰々しくやられてはこっちが困る。わたしはあくまでも一般庶民なのだ。

キースさんが王の執務室のドアを叩くと「入れ」という返事が返ってきた。

わたしはキースさんに促されて入室する。

書類が積まれた立派な机の椅子に座っていたのは、肩を覆うくらいの漆黒の髪と、藍色の瞳の男性だった。

キースさんが中性的な美形とすれば、王様はいかにも男性的な感じの美形。

この人が王様。

どうしよう、なにか挨拶したほうがいいのかな。

「あの……」

なんとか絞りだそうとした声を王様が遮った。

「なぜ、よりによって俺の代になって目覚めるんだ、おまえは」
言外になんてことをしてくれただという言葉を含みながら、王様は心底嫌そうな顔をした。

「いきなりそういうこと言うのは、どうかと思うよ」

不機嫌を露わにする王様に、すかさずキースさんがフォローを入れる。が、既にわたしの中で王様の印象は最悪に近い。

「どう言い繕おうが、俺にとって迷惑な存在であることに変わりはない」

「あの、わたしはそんなに迷惑な存在なんですか？」

つい、間の抜けた質問をしてしまつた。でもあの侍女さん達は少なくともわたしに好意的だった。

「ああ、迷惑だな。分かつたら、とつとと塔に戻って眠りにつけ。そして二度と目覚めるな」

その一方的な言い方に思わずムカつてきた。

「いくらなんでも、そこまであなたに言われる筋合いはないですっ」
「俺にはそう言える権限がある。王だからな」

「へえ、そうなんですか。だとしたらとんでもない暴君ですね。こんな王様を上に乗っている国民がかわいそう」

「なんだと、もう一度言ってみろ」

「何度だって言うわよ！ 暴君！ 暴君！ 暴君！ 暴君！」

もう敬語とかどうでも良くなってきた。もうこいつに丁寧な言葉を使うのも嫌だ。

「きさま……」

「だいたいなに、目覚めたら見たこともない場所で、伝説の姫君とか言われて、あげくの果てには二度と目覚めるな？ ふざけんじやないわよ」

やばい、感情が高ぶりすぎて止められなくなってきた。不覚にも涙が浮かんでくる。

「わたしだつてね、好きでこんなとこにいるんじゃないのよ！ 元の体に戻れるなら喜んで戻つてやるわ！ 分かったか、この馬鹿王
っ！！」

一瞬の沈黙の後。

ぜいぜいと肩で息をするわたし。爆笑するキースさん。啞然とする王様。

涙目でキツと睨むと、王様はなぜか後ろに少し仰け反った。

その顔は反則だよ、とキースさんが呟くのが聞こえたけど、憤っているわたしはそれどころじゃない。

「キース、この女を追放しろ」

「お言葉だけどね、カデイス。この国にとって貴重な観光資源をみすみす追放させる訳にはいかないね」

観光資源で……珍獣扱いか！

気がつかなかったけど、キースさんって結構いい性格してる。

「伝説の姫君が目覚めたことで、この国にもたらされる経済効果は計り知れない。それを他国に持って行かれるかも知れないけど、それでもいいのかい？」

「それは……」

たたみかけるように言うキースさんに、王様の言葉が詰まる。

「じゃあ、わたしはこの国にとって大切な客人なわけね？ じゃあ、せいぜい丁重に扱ってもらわなくちゃね。よろしくね、カデイス！」

今までの鬱憤を晴らすべく、嫌味たつぷりに王様を呼び捨てにしてやった。

「君もいい性格してるよなあ」

感心したようにキースさんが笑う。

「カデイスを呼び捨てにするなら、僕もキースと呼んでもらおうかな。丁寧な言葉もいらさないから」

「え……と、キース？」

「うん、そう。カデイスばかり親しげに名を呼ばれたら、ちょっと癪だしね」

「誰が親しげだ！」

これに関してはカデイスの言葉に賛成だ。

どうやったらこれが親しげに見えるのキース。こいつはわたしの敵だよ。

呆れていたその時、扉がノックされる音が響き、キースがその応対に出た。

その間、わたしは天敵を睨みつけている。

「……可愛くない女だな」

「別にカデイスなんかに可愛いなんて思われたくないし！」

カデイスとわたしが見えない火花を散らしていると、不意に呵々とした笑い声が響いた。

03 確認

声がした方を見ると、七十歳くらいの白髪のおじいさんが楽しそうに笑っていた。

その後ろには二十代後半くらいの薄茶色の髪をした男の人が頭が痛いともいうように額を押さえている。

「伝説の姫君は随分と個性的な方のようじゃの」

「……個性的にも程があると思うが。いくら古の王の妃でも現王を馬鹿王呼ばわりとは」

不機嫌を隠そうともせずにかデイスが言う。

ちよつと待って、今変なこと言ってたよつな気がする。

「古の王の妃ってなに？」

首を傾げながらそう言うと、キース以外の人に凝視された。

え……なに、わたしなにか変なこと言った？

「五百年前の王、アークリッド王の妃って事だよ」

誰も言葉を発しないのでキースが説明してくれたけど、初めて聞く名前だ。

「アークリッド王？ 誰それ」

「呆れた女だな、おまえは。アークリッド王の人生を狂わせておきながら、その王のことも忘れたのか」

「なに、ひよつとしてイルーシャ姫って物凄い悪女だったりするの？」

そのわりにはリイナさん達の態度は随分と友好的だった気がするんだけど。

「おまえ、何を言ってるんだ。まるで他人事のように……」

「仕方ないと思うよ。実際、他人事だからね」

眉を顰めるカデイスに、キースが肩をすくめて言った。

「おまえまでなにを言ってるんだ、キース」

「信じられないかもしれないけど、この娘、姿はイルーシャ姫だけ

ど中身はユーキって女の子なんだ」

「……失礼ですが、キース様。そんなことが起こりうるのでしょうか」

今まで黙ってた薄茶色の髪の男の人が堅い調子で言う。

「禁呪の魂換えなら考えられるけど、ただ、この娘異世界人なんだよね。その点で人物の特定が必要な魂換えが可能とは思えない」

「……異世界人だと？ なにを馬鹿なことを」

「ユーキ」

よく分らない話をぼうつとして聞いていたわたしは、いきなり名前を呼ばれて慌てた。

「な、なに？」

「君がどこに住んでたのか話してごらん」

「わたしは」

注目されてちよつと緊張しながら言いかけた時、ドアがノックされた。入ってきたのはリイナさん。

「失礼いたします。皆様、陽の間にお集まりになりました。お食事の準備も出来ておりますが、いかがなされますか」

「そうだね、主要な人物には事情を説明しておいたほうがいいかもね。紹介もしたいし、すぐ移動するよ。リイナも一緒に来て」

「かしこまりました」

キースの移動魔法でその場にいた全員が別の場所に移動した。

この魔法は二回目だけど、こんな大人数でも移動できるんだ。すごいな。

素直に感心して室内に目をやると、そこには騎士みみたいな格好をした三人の男の人がいた。その内の一人はとんでもない美貌の持ち主だ。

この人達もキースが言っていた主要な人物なのかな。

「とりあえず席に着こうか。ああ、ユーキはここに座って」

キースに椅子を引かれて、わたしは長テーブルの端に着席する。

わたしの目の前にはカデイス、左隣にはキースが座った。

カデイスの横には白髪のおじいさん、薄茶色の髪の人、二十代半ばくらいの赤つばい黒髪の人が着席。

反対側のキースの横には、焦げ茶の髪の四十歳くらいの人、二十代前半と思われる蜂蜜色の髪の人が着席した。

「では自己紹介といきますかな。わしはこの国の宰相を務めているアリストと申します」

白髪で青い瞳のおじいさんが人の良さそうな笑顔を浮かべて言う。「わたしは宰相補佐のイザトと申します。以後よろしくお願いいたします」

アリストさんの隣に座っている薄茶色の髪に水色の瞳をした男の人が堅い調子で言う。なんとというか顔は彫像のように整っているんだけど気難しそうな人だ。わたしはその言葉に慌てて頷く。

カデイス、わたし、宰相、キース、宰相補佐……この席順ってもしかしくなくても偉い順だったりする？

「わたしは近衛騎士団団長のダリルと申します。イルーシャ様、よろしくお願い申し上げます」

キースの隣の焦げ茶の髪に黒い瞳のその人はとっても渋かった。端正な顔といい、若い頃は相当もてたんじゃなかるうか。

「彼はそこにいるリイナの夫だよ」

キースにそう言われて、わたしは後ろに控えているリイナさんを振り返ると、リイナさんは肯定するように頷いた。

「うわー、こんなかつこいい旦那さん、いいなあ。でもリイナさんも美人だし、とつてもお似合いだ。」

「わたしは紅薔薇騎士団団長、ブラッドレイと申します。伝説の姫君にお目にかかれて身に余る幸せにございます」

赤みがかつた黒髪に赤い瞳の瞳のその人は、どこか気障っぽくそう言った。

この人も美形で、いかにももててそうな空気を放っている。あ、こういうのをフェロモンというのか。

「わたしは白百合騎士団団長ヒューイと申します。よろしくお願い

申し上げます」

蜂蜜色の髪と紫の瞳をしたその人は、わたしの予想に反して、とってもハスキーな声だった。

ものすごい美人。いや、男の人だって分かってるけど、とにかく美人。

キースが中性的な美形だとしたら、この人はより女性的な感じのする美形だ。

わたしがぼかんとしてその人を見つめていると、キースがくすくすと笑って言った。

「美人だろ、彼。十代の頃なんて絶世の美少女と呼ばれていたんだよ」

「……へえ、そうなんだ」
「……キース様！」

頬を染めて抗議する姿はどこか可愛くて、美少女と呼ばれていたのも大いに納得した。

それにしてもこのメンバー、やたら美形揃いだなあ。アリストさんの若い頃はどうかだったのかは本人に聞いてみないと不明だけど。

「あ、わたしは由希、原田由希です。日本から来ました」
わたしがそう言つと、事情を知らない三人の騎士さん達が不思議そうな顔をした。

「……失礼ですが、あなたはイルーシャ様では？」
「……ダリルさんが至極もつともな質問をしてくる。」

「ええと、体はイルーシャなんですけど、中身は原田由希なんです」
「は？」

三人にそう返されて、わたしはどう説明しようかと思案する。

こんな話、当の本人であるわたしでさえ信じられないのに、他人が訳分らないのは当然だ。

「見る、キース。こんな荒唐無稽な話、誰も信じないぞ。おまけにこの女が異世界人だと？ おまえ、この女におかしなことでも吹き込まれたんじゃないのか？」

「ちょっと、失礼なこと言わないでよね。それじゃ、まるでわたしがだましてるみたいじゃない」

「実際そうだろう」

「カデイス、ちょっと黙っててくれないかな」

キースが王であるカデイスの言葉を遮ってそう言ったのには、わたしもびっくりした。

こ、これは俗に言う暗黒微笑というやつでは？

どこか黒いオーラを放ちながらキースが微笑む姿は恐怖以外のなものでもない。

「ユーキのいたニッポンという国はどんな国なんだい？」

キースに聞かれて、わたしは慌てて少ない知識を総動員する。

「ええと、日本は四方を海に囲まれた島国だよ。工業が盛んかな。」

一応経済大国って言われてる」

「……島国で経済大国。聞いたことないですね」

イザトさんがこめかみに指を当てて考える仕草をする。

「あ、じゃあ、アメリカは？ ロシア、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストラリア」

とりあえず思いついた国の名前を列挙してみる。

「どれも知らん。キース知っているか」

「どの国もこの世界には存在しないよ。だから言っただろう、ユーキは異世界人だって」

「しかし、それもその女の作り話だと言えなくもないぞ」

「彼女はイルーシヤ姫やこの世界のことについて知らなさすぎる。」

実際に鏡で自分の姿を見て驚いてた彼女を目にしてれば、カデイスも納得すると思うよ」

うああ、お願いだからキース、あの時のことは忘れて！

思わず赤面して頬を押さえるわたしをカデイスはまじまじと見つめると、やがて溜息をついて言った。

「……おまえがそこまで言うのなら仕方ない。一応信じてやる」

「分かってくれたようで嬉しいよ。……じゃあ、食事にしようか」

キースのその言葉を合図に、テーブルに料理が運ばれてくる。

焼きたてのパン、豆のスープ、魚介類を炊き込んだピラフのようなもの。薄くスライスしたジャガイモと挽肉と炒めたタマネギを重ねてパイ生地で包んだ料理。手羽をニンニクで風味付けしてローストしたものの、白身魚のソテー、茹でた野菜などが大皿に盛られていた。

ここの食事は大皿に盛った料理を各自で取る形式らしくて、食事のマナーもそう煩くなさそうなので私はほっとする。

「ユーキ、取ってあげるよ」

キースがわたしの分の料理を全部取ってくれた。

「え、ちよつとキース、わたしそんなに食べられないよ」

「どれが君の口に合うか分からないからね。無理して食べることもないし、残していいから」

……キースのこういうところは、いいところの出なんだなあとと思う。庶民のわたしには料理を残すのがちよつと心苦しいんだけどな。

そう思いながら、淡い緑色をした豆のスープをスプーンですくって口に運ぶ。

「あ、おいしい」

裏ごしして口当たりを良くしたスープは豆の風味と塩加減が絶妙で、思わず口元が綻ぶ。

「パンにスープやソースをつけて食べてもいいんだよ」

「あ、そうなんだ」

早速言われたとおりに焼きたてのパンをちぎってスープにつけて食べてみた。うん、おいしい。

「ここにもお米ってあるんだね。日本のお米と違って細長いけどピラフもどきをすくって食べてみる。うわ、味もピラフそのものだ。ちよつと嬉しい。」

「米がおまえの国にもあるのか」

「うん、一応主食だよ。パンや麺類を食べることも多いけどね。それにしても、ここの料理がわたしのところと似通ってて良かった」

「ほお、異世界でも似たような料理があるとは、不思議なことがあるものじゃの」

アリストさんが感慨深げにそう言ったのを聞いて、わたしはふいに疑問を持った。

「ね、ここが異世界なら、なんで言葉が通じてるんだろ？ わたしの世界では、日本以外の国に行くと言葉が通じないんだけど」

まあ、英語みたいな公用語はあるけどね。

「それは、君がイルーシャ姫の体に入っていることが要因なんじゃないかな。君はこの言葉を普通に話してるよ」

「え、そうなの？」

「うん、たまに分からない単語が混じるくらいだね」

今まで日本語しゃべってるとばかり思ってたから、これには驚いた。

「……そうなんだ。あ、でも、話すのはともかく書く方はどうかな？ さすがにこれは自信ないけど」

「おまえには専任の教師をつけてやるから安心しろ。たっぷり絞らせてやるから覚悟しておけ」

「ええ……」

カデイスの容赦ない言葉に、思わず情けない声が出た。そのくらいわたしは勉強というものが苦手なのだった。

キースが噴き出したのを機に、その場は穏やかな笑いに包まれた。

04 動揺

「勉強は仕方ないからやるけど、できれば元の世界に早く帰りたいんだよね……」

溜息をつきながら白身魚のソテーを切り分けていると、突然周囲が静かになった。

あ、でも、目覚めたわたしはこの国にとって貴重な観光資源なんだっけ。

だとしたら、わたしが元の世界に戻るのは彼らにとって不利益なんじゃないかな。

「……もしかして、帰れないってことはないよね？」
言っただんだん不安になってきた。

ひよつとすると元に戻れずに、ずっとイルーシャのまま、とか……。

「……一応、過去にそういう例がないか調べてみるよ。心配だろうけど、できる限りのことはするから、そんな顔しないで」

キースが慰めるように言う。
わたし、そんなに情けない顔してる？

「しかし、妙な期待を持つより、帰れないと思っておいた方が賢明ではないか？ そんなことを考えていたら、いつまでたってもこの環境に順応できないぞ」

「な……」

カデイスの言葉は正論だろうけど、酷すぎる。

いきなりこんなことになったわたしの気持ちなんてカデイスには分かんないよ。

「陛下……、それはあまりにも……」

ダリルさんがカデイスを諫める。

「カデイス、言い過ぎだよ。それに帰れないと決まった訳じゃない」
「だがな、キース、おまえも言っていたではないか。この女はこの

国にとって貴重な観光資源なのだと。ならば、無理に帰すこともないだろう」

なにそれ、二度と目覚めるなって言ったのはカデイスじゃない。それを……今になってそんなこと言うの？

「それは言っただけど、なにもこんな時に言うことはないだろう？」
カデイスはすぐく意地悪だ。いくらわたしを嫌ってるからって、こんなのもって酷すぎるよ。

気が付いたら、わたしはぼろぼろと涙をこぼしていた。

「ユーキ……」

みんなの前でみつともなく泣き出してしまったわたしは恥ずかしくて顔を覆う。

こんなことで泣くななんてどうかしてる。

「ご、ごめんなさい、わたし……っ」

「……なにを泣いている。別に泣くようなことではないだろう」
なぜか動揺したような声でカデイスが言う。

「イルーシャ様」

控えていたリイナさんがわたしにハンカチを差し出してくれた。それをありがたく借りて目元に当てる。

「わ、わたし、もう部屋に戻るね。食事ごちそうさま」
いたたまれなくて、わたしは席を立つ。

「……部屋に送るよ。リイナ、付いててあげて」
「かしこまりました」

キースが移動魔法を唱えて、わたしは自分に割り当てられた部屋に戻った。

「……イルーシャ様、なにかお飲みになりますか？」

「ううん、いいです。ごめんなさい、今日はもう休みます」

「……そうでございますか。ではお召し替えを」
着ていたドレスを脱いで、リイナさんに寝間着に着替えさせてもらった。わたしはそのまま寝室に向かう。

「おやすみなさい。……今日はごめんなさい」

「……イルーシャ様が、お気になさることはないのですよ。それではおやすみなさいませ。明日の朝、また参ります」
優しくそう言ってくれて、リイナさんが退出する。

わたしはベッドに沈みこむと、枕に顔を押しつけ声を殺して泣いた。

会いたい。

普段は空気のように思ってたのに、こんなことになった今になって、無性にお父さんとお母さんに会いたかった。

帰りたい、うちに帰りたいよ。

手抜きでもなんでもいいから、お母さんの料理が食べたい。

これが夢じゃないとしたら、向こうのわたしの体はどうなってるんだろう。

「由希いいい　っ!!」

誰かが絶叫する声で、わたしははっと目が覚めて起き上がる。

まだ起きるには早い時刻らしく、まだ周囲は薄暗い。

なんだか嫌な目覚め方。

あの声、どこかで聞いたことある気がするんだけど誰だっけ……？

ドキドキしている胸を押さえながら考えて、あれがお母さんの声だということに気が付いた。

家族のこと考えながら眠ったから、あんな夢見たのかな。

今頃わたしの体、どうなってるんだろ。

イルーシャ姫みたいに眠ったままか、最悪、意識不明とか……？
そうだとしたら早く帰らないと。

いくら放任の両親でも、心配かけてるだろうな。

溜息をつけてから、もう一度寝ようと横になる。けれど眠気はもう訪れず、周囲が明るくなるまで、まんじりもしないでわたしは

ただ時間が過ぎるのをベッドの上で待った。

「失礼いたします。イルーシャ様、起きていらつしやいますか？」

「あ、はい。起きてます」

リイナさんに声をかけられて、わたしは豪華な天蓋付きのベッドから這い出た。

「キース様からお花が届いておりますよ」

キースって本当にまめな人だな。

花瓶に生けられた青を基調とした花を見て、ちよつと気持ちが浮上する。

今日はシェリーさんにお風呂に入れてもらった。ちなみにシェリーさんは淡い栗色の髪と瞳の美人。

シェリーさんと呼んだら、シェリーとお呼びくださいと言われて戸惑った。

「ユーニスやわたくしも是非そうお呼びください。イルーシャ様、わたくし達には普段通りの口調で良いのですよ」

リイナさんにそう言われたので、わたしと歳が近いシェリーさんとユーニスは、さん付けをやめることにした。

さすがにリイナさん呼び捨てにはできないと言ったら、苦笑さながら承諾してくれた。……ああ、良かった。

朝の支度と食事を終えて、アツサムミルクティーに似た感じのお茶を飲んで一息入れる。

ころんとした丸い形の茶葉はスパイスやミルクと一緒に煮込んでチャイみたいなお茶にすることもあるそうだ。

コーヒーはないんだろうかと思ってリイナさんに聞いてみたら、どうやらないらしい。残念。

「イルーシャ様、ブラッドレイ様とヒューイ様がいらしてますが、いかが致しますか」

ああ、昨日会った騎士団長の人達か。

「あ、お通ししてください」

しばらくして、花束を手にした二人の騎士団長が現れた。

「イルーシャ様、ご機嫌はいかがですか」

「あ、はい。今日は大丈夫です」

そう返しながら、それぞれの団の名を表す花束を受け取った。：

…それにしても、紅薔薇と白百合ってすごい団名だね。

わたしが二人に座ってもらおうように促すと、シェリーが頬を赤く染めながら新たにお茶を淹れて持ってきてくれた。

ブラッドレイさんがお礼を言うと、シェリーはさらに真っ赤になつて慌てたように退出していった。いやはや美形の威力はすごいなとわたしは妙な感心をしてしまった。

「あの……ブラッドレイさん、ヒューイさん、昨日はすみませんでした」

わたしが昨日の非礼を詫びると、二人は微笑んだ。

「いいですよ。イルーシャ様が気になさることではありません」

「あと、我々に敬語は必要ございません。どうぞ、ヒューイ、ブラッドレイとお呼びください」

その美貌にあまり似合わない堅い口調でヒューイさんが言う。

「え……でも、わたし中身は庶民ですし」

年上のいかにも貴族然とした二人を呼び捨てにするのは気が引けた。

「陛下に敬称をつけていらつしやらないのに、我々に丁寧な言葉遣いはまずいでしよう。……聞きましたよ、なんでも陛下を馬鹿と言われたとか」

ブラッドレイさんが多少砕けた口調で冗談めかして片目を瞑る。

「あ、あれは……っ」

確かにあれは自分でも暴言だったと思う。

カーツと顔に血が上るのを感じて、わたしは頬を押さえた。

「あれは、カデイスが失礼なこと言うから……っ」

「……失礼なことですか？」

「なんでも、わたしはカデイスにとって迷惑な存在らしいですよ。とっとと塔に戻って眠りにつけ、そして二度と目覚めるなど言われませんでした」

「それは……酷いですね」

ヒューイさんが額に手を置いて唸るように呟いた。

「陛下も物言いが少しきついところがありますからね」

「……少しですか？」

「いえ、かなりですね」

わたしの疑問にブラッドレイさんが苦笑いを浮かべて訂正する。

「イルーシャ様、先程も言いましたが、我々に丁寧な言葉はいりませんから。できればブラッド、ヒューと呼んでいただけると嬉しいですね」

「分かりま……、う、うん、分かった。じゃあ、わたしにももう少し砕けた口調で話してくれると嬉しいな」

「イルーシャ様がそう言うのでしたら。公式の場では無理ですけどね」

「うん」

堅苦しいのは苦手なので、わたしはほっとする。

「あ、そういえばカデイスのことなんだけど、よりによってなぜ俺の代で目覚めるんだって言ってたけど、どういう意味なのかな？」

わたしがそう聞くと、二人は一瞬の間を置いて、お互いの顔を見合わせる。……いつたいなんだ？

「……それは、世論があなたを陛下の妃にと押すからだと思いますよ」

……はあ？ なにそれ？

想像を超えた話にわたしはぼかんとする。

「……この国では結婚歴のある人間を王妃にできるの？ 普通無理だよ」

「……そうですね、普通は無理ですね」

ヒューがわたしの言葉に頷く。

「わたしの世界の他の国の話だけれど、離婚歴のある女性と結婚するために退位した国王がいるよ。王冠を賭けた恋と呼ばれてるけど」

「王冠を賭けた恋か、なんとも情熱的な話ですね」

ブラッドが意味ありげに流し目をくれる。

「……なんだろ？」

「ブラッド、イルーシャ様にまで色目を使うのはやめろ」

あ、そういうことなんだ。

「気にしてないから、大丈夫だよ」

「……いえ、少しは気にしてもらえると嬉しいのですが」

「こころなし肩を落としたようにブラッドが呟いた。それを無視してヒューが続ける。」

「……話を戻しますが、この国は他の国と違って特殊な事情があるんです。イルーシャ姫が目覚めたら、その代の王か王子が姫と結ばれると言われています」

「へえ、そうなんだ」

「……あれ、今なにか変なこと言わなかった？」

もう一度、ヒューの言葉を思い返す。

イルーシャ姫と、王か王子が結ばれるとか何とか。

イルーシャ姫はわたし。王はカデイス。……ってことは、カデイスとわたしが結婚するってこと？

「え、えええええ？」

「イルーシャ様、反応が遅すぎます」

ヒューのその突っ込みにも激しく動揺したわたしは言い返すことができなかった。

05 天敵

「カデイスと結婚なんて冗談でしょ？」

まあ、向こうもそう思ってると思うけど。

「イルーシャ様、そうは言いますが、民意というものは無視できないものですよ」

「それはそうかもしれないけど、お互い嫌いあってるのに、結婚なんて無理でしょ」

真面目に言ってくるヒューに、正直唸りたい気分では返す。

「……陛下のことがお嫌いなんですか？」

「ああまで言われて好きになる方がどうかしてると思うけど。わたしにとってカデイスは天敵だよ」

「天敵か、これはいい」

なにがいいんだかよく分からないけど、ブラッドが膝を叩いてウケている。

「まあ、陛下はそこまであなたを嫌ってるわけではないと思いますよ。いや、むしろ……」

「むしろ……、なに？」

意味ありげに言葉を濁すブラッドにわたしは首を傾げると、彼はふっと笑って首を横に振った。

「いや、俺が言うようなことではありませんね。もしかしたら、そのうち陛下からなにかあるかもしれませんよ」

「……なにそれ？ 全然訳分からないよ」

「いいんですよ、無理にお分かりにならなくても。では、そろそろ我々はおいとましますよ」

えええ？ ちょっと、それって言い逃げじゃないの？

「おい、ブラッド」

「おまえにはきちんと説明してやるから」

そう言っつて、せき立てるようにブラッドがヒューの肩を軽く叩い

た。

「それでは失礼します、イルーシャ様」

「失礼いたします」

ブラッドとヒューがそれぞれ騎士の礼をして部屋を退出する。

「……なんなの？」

一人残されたわたしは疑問符だらけだ。

そんなところに、シェリーがやってきた。なんでも、エトール侯爵令嬢のアイリン姫がわたしに面会を求めているという。

……なんだか来客の多い日だなあ。

面識はないけど、身分の高い人みたいだし、会った方がいいのかな。

そう思って通してもらおうように言うと、しばらくして鈴を転がすような声が響いた。

「まあっ、伝説の姫君が目覚められたという噂は本当だったのですね！ おとぎ話にある通り、本当にお綺麗な方！」

現れたのは金髪碧眼のお姫様。

うわあ、可愛いなあ。

いかにも純真無垢そうな可憐な姫に、わたしは目を細める。

わたしは一目でこの可愛いらしい姫が気に入ってしまった。

「はじめまして。エトール侯爵の娘、アイリンと申します。イルーシャ様、よろしくお願ひ申し上げます」

「こちらこそ、よろしくお願ひいたします」

わたしも見よう見まねで挨拶を返す。それからアイリン姫に席に着いてもらった。

シェリーに女の子が好きそうなお茶菓子とお茶を出してもらってわたしとアイリン姫のお茶会が始まった。

「実はわたくし、目覚めたばかりで記憶が抜け落ちておりますの。ですから、伝説の姫君などと呼ばれて少々戸惑っています。もしよろしければ、その伝説というものをお話頂けるとありがたいのですけれど」

わたしのお姫様言葉、変じゃないよね？

この言葉遣いは疲れるけど、アイリン姫にとっては、わたしはあくまでイルーシャ。伝説の姫君なのだ。その姫君のイメージを崩すようなことは、なるべくしないようにしないと。

でもまあ、わたしの即席お姫様言葉はどうやらアイリン姫に通用したようだ。

アイリン姫は瞳を見開いて、まあ、と頬に手を当てると、お気の毒に、と呟いた。

アイリン姫の口から紡がれたのは、五百年も昔の物語。

悪い魔法使いに眠りにつかされた王妃が、再び半身たる王に巡り合うのを待っているというおとぎ話だった。

それに加えて、この国ではイルーシャ姫が目覚めれば、その代の王が王子がアークリッド王の生まれ変わりであるということが通説のようになっていくことも話してくれた。

ああ、だからカデイスはわたしによりによって俺の代でと言ったんだ。

そんな人物が突然目覚めたら確かに鬱陶しく思うだろう。

……だからって、あの態度はどうかと思うけどね！

「あの……大変不躰ではありませんけれど、本日はわたくし、イルーシャ様にお願いがあって参りましたの」

「……お願いですか？」

わたしがその先を促すように首を傾げると、姫は自分の手をきゅつと握りしめて思い詰めたように言った。

「はい、実はわたくし、陛下の妃候補なのです。ですが、わたくしには事情があります。なんとかかそれを辞退することはできないものかと考えまして……。そんな時にイルーシャ様が目覚められたと聞き及びましたので、図々しくもこちらに押しかけて参った次第ですの」

なんでも、アイリン姫には幼馴染みに想い合っている人がいるらしい。

同じくらいの家格らしいので、その人と結婚するのはなんの不都合もないらしいのだけど、婚約を発表しようとした矢先にカデイスから姫の父親へ輿入れの打診があったらしい。

その為、幼馴染みとの婚約話は立ち消え。

王と普通の貴族じゃ、王の意志が優先されるに決まってるものね。「イルーシャ様が目覚めてくださって、本当に助かりましたわ。もうわたくし達、二人で駆け落ちする覚悟までしておりますもの」「駆け落ちする覚悟っていったら相当だよな。今までなに不自由なく生活していた家や家族を捨てるほどの覚悟。

わたしには好きな人がいたことないから、その気持ちはよく分からないけれど。

「それほどまでに想い合っているのなら、わたくしが王に事情を話しますわ。言ってお分かりにならない王ではありませんもの。大丈夫、姫が心配なさることなど、なにもありませんわ」

「イルーシャ様……」

うるうると瞳を潤ませてアイリン姫がわたしを見つめる。

うっ、可愛いなあ。わたしが男だったら、絶対惚れてたね。

それにしても、カデイスは失恋確定だよな。ざまあ、なんて思うほどわたしは鬼ではない。いやちょっとだけ思ったかもしれないけど。

それから、わたしに何度もよろしくお願いしますと言って、アイリン姫は帰っていった。

「うっ、疲れたあー」

誰もいない部屋でわたしは延びをした。

本当、慣れないことはするもんじゃないわ。

ちょっとだらしく長椅子に寝そべりながら、これからのことを考える。

このまま寝室に行つて寝てしまおうか。

「んー、どうしようかなあ……」

でもカデイスに姫の事情を話すつてアイリン姫と約束したんだよなあ。やつに会うのは気が重いけど、うん、やっぱり約束は守らな
いとね。

「……よしっ」

気合を入れて、長椅子から立ち上がる。

天敵であるカデイスにこれから立ち向かうために。

そんなわけで、わたしは今、王の執務室の前にいる。

ドアの前には私と同じくらいの歳の近衛騎士が立っていた。栗色の髪と青い瞳はどこかで見た色彩だ。

「あれっ、ひよつとしてあなた、リイナさんの」

「はい、息子です。イルーシャ様には、母がお世話になっております」

「いやいや、お世話になってるのはこっちだから」

近衛に息子がいると聞いてたけど、ダリルさんに似ててかっこいい。もうちょっとすると、男前と騒がれそうな容貌だ。

名前はマーティンと言うらしい。歳は私より一つ下の十八歳。マーティン君と呼んだら、君はお止め下さいと嫌がられた。仕方ないので、心の中だけでマー君と呼ぶことにする。

「カデイスに会いたいんだけど」

マー君に取り次いで貰つて、部屋に入った途端、こう言われた。

「またおまえか」

なにおうっ!?

聞こえよがしに溜息までつかれて、臨戦態勢に入りそうになった

わたしは、はた、と思いとどまった。

いけない、いけない。わたしはアイリン姫の結婚話についてカデイスを説得しに来たんだった。

「あの、アイリン姫のことなんだけど」

「……なんだ、会ったのか？」

「うん、さつきね。あの、姫には他に好きな人がいるんだって。でもその人と一緒になるには、もう駆け落ちするしかないって思い詰めてた。だから、姫との結婚を考え直してくれないかな？」

「好きな人がいる、か。それがどうしたというんだ。王族や貴族の結婚は、恋愛感情などとは無縁のものだ。おまえには政略というものがどういうものか分かっていないようだな」

「でも、少なくともカデイスは姫のこと好きだよな？」

わたしがそう言うと、カデイスは少し不愉快そうに眉を顰めた。

「好きとか嫌いとかでの問題ではない。本当に口の減らない女だな、おまえは」

「うわっ、なんか言っちゃいけないことだった？ あんな可愛い姫なら好きにならないわけはないと思って、つい言っちゃったけど。」

「……そうだな、どうしても言うなら、考えてやらなくもないぞ」
「え、本当！？」

思わず、わたしは色めきたった。

なんだ、カデイスつてば結構話分かるじゃない！

「アイリンが駄目なら、おまえが代わりに王妃になることになるが、それでもいいか？」

「え……？」

思わず頭の中が真っ白になる。

なにを言ってるんだこの男はー！？

「ななな、なに言ってる……っ、わたしが王妃になれるわけないじゃないっ。だ、だって、わたしはひ、人妻ですからー！」

昔の王の妃だったなら、そうだよな？ あ、この場合、正しくは未亡人か。

叫ぶように言ったら、カデイスがくつと笑いだした。

「おまえほど人妻という言葉が似合わない女もいないな。落ち着きが全くない」

そんなことないと言えないのが、ちょっと哀しい。どうせわたしには人妻の色気なんかありませんよ！

「確かに色気はないが……まあ、それは追々どうにかなるだろう」「はあ？」

意味が分からず、思わず首を傾げていると、カデイスに腕を引っ張られた。そのままカデイスの腕の中に閉じこめられると、カデイスは感心したように言った。

「おまえは抱き心地がいいな」

「っ！？」

はいっ！？ ちょっとあなた、どうしちゃったんですか！？

突然の事態に混乱するわたし。

そんなわたしの気持ちもお構いなしに、カデイスの大きな手が背中を滑る。その途端、ぞくりとした感覚が背筋に走った。

思わずびくりと反応してしまったわたしに、カデイスがにやりと笑った。

「なんだ、ここが弱いのか？」

「なに人の背中撫で回してるのよ、このセクハラ大王！ 離せえええっ！」

「なにを言ってるのか分からんが、とりあえず嫌がってるのは分かった」

「分かっているのなら、とつとと離しなさいよ！ この馬鹿 っ！」
「何度も俺を馬鹿扱いするのはおまえくらいだな」

滅茶苦茶に暴れるも、カデイスの腕は緩まない。

本当にもう、嫌だああああ！

「カデイス、いい加減にしときなよ。嫌われるよ」

突然声が響いて、空中からキースが現れた。

いや、もう嫌ってたから！

カデイスもそのはずなのに、どうしてこうなったんだ。

……そうか、嫌がらせか。嫌がらせなんだな？

「キース、助けて！」

「はいはい、お姫様」

キースがわたしの手をとって、カデイスの腕から救い出してくれた。

……が。

なぜかキースはそのまま腕を引いて、わたしをぎゅっと抱きしめた。

「ああ、本当に抱き心地いいね」

なに、そのセリフ。

ひょっとして今までのやりとりを黙って見ていたわけ？

「おまえものぞき趣味とは悪趣味だぞ」

「いやあ、おもしろそうだから、ついね」

じゃあなに？ わたしが困ってるのを見て楽しんでたってこと？

わたしをのけ者して話す二人に、わたしはワナワナと震えた。

「二人とも、わたしで遊ぶな　っ！」

そうわたしが叫んだのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632ba/>

月読の塔の姫君

2012年1月2日23時52分発行